令和5年度 本郷中学校
第1回 入学試験問題

国語

（五〇分　満点：一〇〇点）

注意

一、問題の解答は解答用紙にはっきりと記入しなさい。
二、指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
三、答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
四、字数指定のある問題は、特別の指示がない限り、句読点、記号なども字数に含みます。
五、用具の貸し借りは禁止します。
六、指示があるまで席をはなれてはいけません。
七、質問があれば、だまって手をあげて監督者を呼びなさい。
八、試験が終わったら、解答用紙だけ提出しなさい。問題は持ち帰ってもかまいません。

【二】 次の①～⑤の――線部について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分はその読みをひらがなで答えなさい。なお、答えはていねいに書くこと。

① 列車が警笛を鳴らしながら通過した。
② 紅葉はバンシュウの時期が美しい。
③ よく冷えたタンサン水が出された。
④ 私は彼にオンギを感じている。
⑤ 床がカガミのようにみがかれていた。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人類の歴史を辿(たど)ると、共同体から機能集団の歴史になりました。機能集団の一例は、会社などの組織です。一方、共同体というのは家庭などです。

かつては共同体に属してさえいれば、「君は君だから生きている意味がある、価値がある」とされた。人間はそこにいること自体に意味が持てました。

ところが、機能集団というのは共同体とはまったく異なり、そこに属しているだけでは価値や意味を持てません。

A、会社の部長が「俺は俺だから意味がある」と言って、その役割を果たさなければどうなるでしょう。会社は潰(つぶ)れてしまうかもしれません。そもそも、その人が集団の中で求められている役割を果たさなければ、必要とされないでしょう。人間の社会は共同体から機能集団になったわけですが、この流れ自体が、[1]我々にとって不安な時代に入ったことを意味しています。

さらに、現代について考えてみると、消費社会、競争社会へ変化してきました。実はこのことが、我々の不安をより強いものにしているのです。

競争社会とそうではない社会とでは、我々が感じる不安はまったく違います。

競争社会は、勝つか負けるかという社会です。勝つことでしか不安から逃れられない人は、早く結果を出そうとして焦(あせ)る。いましていることの結果を気にして、いつまでも不安です。

また[2]消費社会も同様に人を強い不安に陥(おとしい)れます。

消費社会は「これを買えば、こんないいことがありますよ」という商品をどんどん売る社会です。このクリームをつけたら「十歳若返ります」「きれいなお肌になります」「このハンドバッグを持ったらすてきに見えますよ」といった具合に商品を売りつけます。

要するに、消費社会は「安易な解決を可能にする商品を競って売る社会」なのです。

安易な解決を求めるというのは、社会全体が神経症[注1]に陥っていることを意味しています。

人は生きている以上、さまざまな苦しいこと、大変なことに直面しますが、そうした苦しみに対して「こうすれば解決できる」と言う人がいると、安易な解決法を求めて、多くの人がその人のところに集まってしまう。

いわば消費社会とは、みんなが一生懸命、神経症に向かって走っているような社会。しかも、それを社会として推奨しているのです。

人生を生きるのは本当に大変で、人間は誰もが幸せになるようにプログラムされているわけではありません。

そうであるにもかかわらず、「これを読めば幸せになれます」という本がどんどん出版されます。どうすれば簡単に不安を消せるか、といった内容の一時間か二時間で読める本を出版社も求めるのです。

もちろん、それほど簡単に不安を消すことなどできませんが、だからといって本当に不安を消すことができる方法を説いた、実践することが難しい内容の本は、出版社から発刊を断られます。

「不安を消せる、こんな簡単な方法がありますよ」という本と、「人間の不安というのは根源的な問題であり、大変なことなのだ」と書いた本があるとします。

さらに、後者には「生きるということをなめてはいけないよ」というようなことが書いてあったとしましょう。そうした時に、読者がどちらを買うかといえば、多くの人が不安を消す簡単な方法を書いてあるほうを手に取りがちです。

消費社会はとにかく物を売ることを優先するので、「これを買えば、こういうことが可能」ということを散々宣伝します。まるで当然のことのように、いかに容易にその不安が解決できるかを示し、これを買えば「こんなにいいことがあるよ」と売り込みます。

しかし、そんな魔法の杖のようなものはありません。よく考えれば分かることですが、もし「こうすれば幸せになれますよ」ということが本当なら、人類はとっくの昔から幸せになっているはずです。

そのような、ないはずの魔法の杖を売っているのが消費社会なのです。こうすれば幸せになれる――そんなことをしたって、

幸せにはなれるわけがないのに、いかにして安易に望むものが手に入るか、ということを競って売っているのです。

人生の課題の一つにナルシシズム[注2]があります。

人は誰もがナルシシズムを持って生まれてきます。生きていく過程で、そのナルシシズムを昇華し、克服して、我々は成長していくわけです。

人間が成長していくためには、その時期、その時期でどうしても解決しなければならない課題がありますが、このナルシシズムを解消することで精神的に成長していくのもその一つです。ところが、世の中には、この克服すべきナルシシズムを満足させるようなものがたくさんあります。「このバッグを持ったら、すてきですよ」というのは、まさにナルシシズムを満たしてくれる商品の一つです。

本来、人間は成長とその反対である退行の葛藤（かっとう）の中で、生きていくべき存在です。しかし、消費社会というのは、我慢や苦労なしで安易に欲求を満たしてしまう社会なのです。

一時的には成長に伴う苦しい試練に直面せずに生きていける社会ではあるのですが、成長を避けていると、結局人生[3]に行き詰まります。

ナルシシズムや退行を無理に乗り越えなくても、楽しく生きていける社会であれば、いいのではないか、という考えもあるでしょう。しかし、歳を重ねてある年齢に達し、自分の人生を振り返った時に、本当に心から触れ合える人というのは、自分が成長していなくては得られません。そういう人が誰もいなかったことに、人生の終盤で初めて気づくとしたら、これほど寂（さび）しいことはありません。

それにもかかわらず、消費社会は「そういう生き方が一番いいですよ」とすすめているのです。

人間が成長していく中での課題には、ナルシシズムや退行の克服だけではなく、もう一つ、親からの自立、つまり「オイディプス・コンプレックス」の克服があります。

これは、フロイト[注3]が「人類普遍（ふへん）の課題である」と述べたほどで、当然簡単に解決できるはずのないものです。

B 消費社会では、そうした課題に対しても、「ここに行けば解決する」「この本を読めば解決する」という情報が売られています。真の成長が得られない解決法が、「これで解決できる」と言って売られているのです。

本来、人生の充足というのは、そのように簡単に解決できるものではありません。人生における不可避的な課題が、次から次へとたくさんあって、それらを解決しながら何とか成長することで、その結果、ようやく手に入るものです。成長と退行の葛藤の中で生きていくことには、ものすごい負担とリスクが伴うのです。

一方で、そうした負担とリスクを負わずに生きていくこともできますし、いまの社会はその方法も教えてくれます。ただしその場合、前にも述べたように、人生に必要な成長を遂げていないので、最終的には行き詰まることになります。

だからいま、誰もが不安に陥っているのです。

（中略）

4 人間は非常に不公平です。

両親の仲が良い家庭に生まれれば、お母さんに母親固着[注4]を満たしてもらい、お父さんに励[はげ]ましてもらえます。そうした環境で、人生の課題をそれぞれ乗り越えながら、自立して生きていくことができます。

しかし、生まれた家庭が、両親の仲が悪い場合もあります。いつもお父さんがお母さんに暴力を振るっていて、お母さんの泣き声を聞くのが嫌で、耳をふさいで押し入れに入っていた。そればかりか現在では、幼児虐待[ぎゃくたい]が増えています。

このように、とことん虐待される家庭に生まれる人もいれば、家族仲の良い家庭に生まれる人もいる。肉体的にも心理的にも不安を抱えた、孤独で虐待される環境に生まれる人もいれば、イギリスの精神科医ボールビー[注5]が言うような「無意識の安心感」を持って成長する人もいます。

ボールビーの言う「無意識の安心感」とは、意識しないで自分は安心感を持っている、ということです。つまり、保護と安心、

安全を保障されていると無意識に感じている。ボールビーはこれを「Unconscious reassurance（アンコンシャス リアシュアランス）」という言葉で表現しています。

どんなことがあっても必ず助けてくれる人がいると信じている、自分は常に愛されて保護されている、という安心感のもとに生きていて、無意識の安心感を持てるというのは、本当に素晴らしいことです。

そんな、どんなことがあっても自分を助けてくれるという無意識の安心感を抱き、保護と安全という人間の根源的な欲求が満たされている人がいる一方で、そうではない人もいる。ところが社会は、こうした前提の違いがあるのにもかかわらず、全員を同じように取り扱います。無意識の安心感のある、なしにかかわらず、二十歳になったら、二十歳の人間として同様に扱うのです。

しかし、その二十歳の人の中には、心理的には二、三歳どころか、さらに未熟で、生まれたままのような精神年齢の人もいれば、人間として成熟しつつある人もいる。

C、心理的に幼い人のもとに生まれてくる子どももまた、肉体的にも心理的にも不安のまま生きていくことになるのです。

しかし、どのような環境のもとに生まれようとも、自分の運命を成就して、最後まで生きなければならない点は同じです。

その意味でも我々にとって大切なことは、人格の再形成です。

つまり、これまでとは別の視点で、自分の価値観を見つめ直すということです。

周囲の人が自分に求めてきた価値ではなく、自分が信じる自分の価値に価値観を再構成するのです。

前述したように、世の中には「無意識の安心感」を持つ人もいます。何かあったら、必ず自分を助けてくれる人がいると無意識に信じられる人がいる。その一方で、他人が怖い、何をされるか分からない、生きるのが怖いという人もいます。

あるいは「記憶に凍結（とうけつ）された恐怖感」という言葉があります。これは、幼児期に自分はいつ殴（なぐ）り殺されるか分からないような環境の中で育った結果、抱くようになった恐怖感です。

記憶に凍結されたこの恐怖感は十年、二十年、そんな期間では変わらないと考えられています。何もしなければ、死ぬまでこの恐怖感を持って生きていくことになります。

どのような家庭に生まれるかは、もちろん当人の責任ではありません。

しかし、そうした運命を抱えて生まれ、いつまでも「記憶に凍結された恐怖感」のような恐怖を抱えて生きていると、四十歳になっても五十歳になっても、七十歳になっても八十歳になってもその人は幸せになれません。

大切なのは、我々は自分がめぐり合わせた人生としっかりと向き合い、自分の人生を受け入れながらも、人格を再構成することによって、新しい人生を切り拓(ひら)くことです。

「おやじがアルコール依存症(いぞんしょう)で暴力を振るってどうしようもない」。そういう環境の中で生まれた人にとって、これは「記憶に凍結された恐怖感」です。これは長い間、強く残ります。しかし、何もせずにそのまま生きて、「はい、あなたの人生つらかったですね」ではあまりにも悲劇的ではないでしょうか。

5 そういう人生を全部、再構成していかなくてはいけません。またそのためには、自分の人生はどういう人生なのかを考えることが、極めて大切なのです。

（加藤諦三(たいぞう)『不安をしずめる心理学』）

※問題作成の都合上、文章を一部省略しています。

注１　神経症……心理的な原因によって起こる心身の機能障害。

注２　ナルシシズム…精神分析の用語で、自分自身を愛すること。自己愛。うぬぼれ。

注３　フロイト……ジークムント・フロイト（一八五六―一九三九）。オーストリアの心理学者。精神科医。

注４　母親固着……精神分析の用語で、母親からの愛情を強く求め、執着すること。

注５　ボールビー……ジョン・ボールビー（一九〇七―一九九〇）。イギリス出身の医学者。精神科医。精神分析家。

問一 [A]～[C]にあてはまる語句として最も適当なものを次のア～カの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上選ぶことはできません。

ア 例えば　イ それなら　ウ さらに　エ なぜなら　オ ところで　カ ところが

問二 ――線１「我々にとって不安な時代に入った」とありますが、なぜ「我々」は「不安」を感じるようになったと考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人類の歴史の変化のなかで、家族から会社へと人間社会の中心が移り変わり、よく知らない人たちとも積極的に交流していかなければならなくなってしまったから。

イ 社会構造の変化によって、集団に所属しているだけでは自分の存在理由が見出せなくなり、そのなかでの役割をやりとげなければ不要な存在と見なされてしまうから。

ウ 機能集団とは共同体とは全く違い、共同体から機能集団へと変化したことによって、今まで共同体で培(つちか)ってきた経験や技術が全く役に立たなくなってしまったから。

エ 社会構造が大幅に変化し、働き方も変化を求められていくなかで、人々はみな任された役割を果たすことができずに、自分の存在価値も分からなくなってしまうから。

問三　――線２「消費社会」とありますが、ここでの「消費社会」とはどのような社会だと筆者は述べていますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　一つでも多くの商品を売るという競争を強いられた結果、たとえ効果を偽ってでも商品の売り上げを優先させずにはいられないような社会のこと。

イ　生きていくうえでの苦しみを簡単に解消できるかのようにうたった商品を売りつけ、消費者もそんな商品を求めずにはいられないような社会のこと。

ウ　人間全員が幸せになれないという不安を解決できるような商品を提供することで、購入者たちを少しでも救おうと努力しているような社会のこと。

エ　売る側にとっては不本意ながら客の購入のしやすさを優先して、本来不安を解消することは難しいのに、安易な解決策で対処するような社会のこと。

問四　――線３「人生に行き詰まります」とありますが、なぜ「行き詰ま」ってしまうと筆者は考えているのですか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　我慢や苦労をしないで欲求を満たしてくれる消費社会は、神経症にかかることを人々に促しているのにもかかわらず、それを治すための体制が整っておらず、医学が追いついていないから。

イ　人間が成長するうえで欠かせないのがナルシシズムだが、現在の社会ではそれを解消したり克服したりすることばかりに目が行きがちで、最終的に人々は成長できなくなってしまうから。

ウ　自分の人生を生きるためには親からの自立が最も重要だが、それを実現するための大きな負担とリスクが消費社会では与えられず、人々はうまく人生を送ることができなくなってしまうから。

エ　人生を充足させるためには負担とリスクとを乗り越えることが必要だが、今の消費社会ではそれらを避けて生きることが可能なため、人々は人生に必要な成長の機会を奪われているから。

問五　――線４「人間は非常に不公平です」とありますが、「不公平」と言えるのはなぜですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　世の中には両親の仲の良い家庭で育った場合と、そうではなく両親の仲の悪い家庭で育った場合とが考えられるが、社会は不仲な家庭で育った人々に対して手を差し伸べようとしないから。

イ　肉体的にも精神的にも不安を抱えた環境で成長した人は、無意識の安心感を持つことができなくなり、人間の根源的欲求である保護と安全とを満たすことが人生の目標となってしまうから。

ウ　社会は人間全員を同じように扱うのにもかかわらず、それぞれが生まれ育った環境の違いによって、無意識の安心感を持つことができている人とそうではない人とが世の中には存在するから。

エ　人間にはそれぞれ違いがあって当然であるのに、社会では全員を一律に同じものとして取り扱ってしまうので、その違いをなくすために家庭環境とは関係なく努力をしなければならないから。

問六　――線５「そういう人生を～いけません」とありますが、「そういう人生を全部、再構成してい」くとはどういうことですか。三十字以上四十字以内で分かりやすく説明しなさい。

問七　次のア～オのうち、問題文の内容と合致しているものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア　現代の消費社会や競争社会という不安に満たされた枠組みから脱却し、人々が安心できる新しい社会体制の創出が求められている。

イ　すてきなバッグを持つことによって自分自身にうっとりすることが可能となるが、そのことによって本当に幸せになれるわけではない。

ウ　家族仲の良い環境に生まれて意識せずとも安心感を持てた人は、根源的な欲求を満たすことができるので、それはとても望ましいことだ。

エ　人間は個性を持った存在のため、社会は全員をみな同じように受け入れていくのではなく、それぞれの持つ個性を優先的に尊重すべきだ。

オ　生まれた環境によって植え付けられた恐怖心は強く残るため、その人に対して親身に寄りそってくれる存在が何よりも大切だ。

【三】 次の文章は、青山美智子（あおやまみちこ）の小説『赤と青とエスキース』の一節です。主人公の「僕」（空知（そらち））は、「アルブル」という額縁工房で一人前の額縁職人（＝額職人）を目指し仕事に励んでいます。ある日、円城寺画廊（えんじょうじ）から二枚の絵の額縁制作を依頼されます。そのうちの一枚、赤い服の若い女性をモデルにした「エスキース」という絵は、「僕」が大学三年の夏にオーストラリアのメルボルンで出会い、額縁職人になるきっかけを与えてくれたジャックが描いたものでした。次の場面は、「僕」が工房の経営者である村崎さんに頼み、「エスキース」の額縁の制作を担当させてもらうところです。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

僕はモール[注1]ディングのサンプルを詰め込んだ箱を作業台に運んだ。工場で作られたすでに出来上がっている額竿（がくざお）だから、カットしてそのまま組めばいい。幸いなことに、アルブル工房には種類が豊富に揃（そろ）っている。

デッサンした形状に近いものを、その中から探していく。これまでも、村崎さんを手伝いながら何度もこうやって額装をしてきた。きっといいものが見つかるはずだ。

山型の断面になっているモールディングをいくつか取り出し、絵にあてながら僕は完成図を想像した。でも、なかなか決めることができなかった。

……何かが、違う。

今ひとつ、しっくりこない。そんなに難しいデザインではないのに。思い描いているのと似たような額竿がたくさんあるのに、すぐそばまで近づいていると思うのに、何が違うんだろう。

僕は目を閉じてため息をつく。少し休憩しようと、立ち上がった。

冷蔵庫まで歩いていき、麦茶のポットに手をかける。そのとき、円城寺さんの言葉が頭に浮かんだ。

「こういう人がいいっていうんじゃなくて、この人がいいって思えたら、それが完璧な組み合わせだと思いますよ。人ってみんな、ひとりしかいないんだから」

ああ、と僕は声を漏らした。

僕はずっと「イメージに近いもの」を選んで額装してきた。いつの頃からか、そういう仕事のやり方が身についてしまっていた。

円城寺さんの言葉を、額と絵に置き換えてみる。

1 ――――こういう額がいいっていうんじゃなくて、この額がいいって思えたら。

それが完璧な組み合わせだ。絵ってみんな、ひとつしかないんだから。

冷蔵庫の扉を閉め、工房の隅に走った。木材の置いてある場所だ。

僕は探し求める。

「近いもの」じゃない。それしかないと、ぴったりくるものを。

（中　略）

「村崎さん、僕……相談があるんです」

ちょっと僕を見やると村崎さんはテーブルに着き、促すようにして椅子を指さした。僕は村崎さんと向かい合い、そこに座る。

「あの絵の額、モールディングじゃなくて木材から作ってもいいですか」

今まで村崎さんがそうするのを手伝ったことはあったし、練習として自分用に作ることはあった。でも、受注品をひとりで木材から手掛けたことはない。そして、失礼な話だが円城寺画廊が潤沢な予算を出してきたとは思いづらかった。

僕はかなり意を決して申し出たのに、村崎さんは驚きもせずあっさりとこう言った。

「やっとその言葉が出たか。おまえがそう言うの、待ってたよ」

「……でも、予算のこととか」

2 僕がおずおずと言うと、村崎さんは唇の端を片方、上げた。

「俺、ひとつは流木使うから。おまえの額装に多少金がかかっても、トントンだ」

僕は安堵(あんど)と喜びとで、「タダですもんね！」と笑った。ところが村崎さんは、不本意な表情を浮かべる。

「タダっていうのとは違うぞ。プライスレスだ」

村崎さんはテーブルの上で手を組んだ。

「今回、円城寺画廊が持ってきた作品の中に、十九世紀の旅芸人の一座を描いた油絵があってな。家族なのかもな。老人も子どももいて。あれを見たとき、おお、ここにつながったか、ぴったりだと思ったんだ。流れ流れていろんな景色を見てきたであろう流木が、今の姿になるまでの長い時間と経験、表情や味わいをそのまま大事に活かせるって」

急に興奮気味に話し出した村崎さんに、僕は戸惑(とまど)った。

村崎さんはいつも黙々と作業しているから、心も常に冷静沈着なんだと思っていた。でも違った。彼はほんとうに額縁を作ることが好きで、こんなに熱い気持ちでひとつひとつに取り組んでいたのだ。

まるで用意されたかのように、村崎さんの手にたどりついた流木。

そうか、そういうことだったのか。

「村崎さん、こんなときのために、流木を拾ったりしてるんですね」

納得しながら僕が言うと村崎さんは、いや、と首を振る。

「今回はたまたまだ。売り物になるかどうかは関係なく、俺はただ手作りの額ってものを残したいだけだよ。形にして見せないと、知ることもできない」

見せる？　知るって、誰が？

僕がきょとんとしていると、村崎さんは顎(あご)に手をやりながら言った。

「俺は、ちょっと危機を感じてるね。日本美術が危ないって。それは素材から言えることで、たとえば江戸時代以前の書物はま

だきれいに残ってるだろ。でも、ここ百年で作られた紙は粉化しちゃってそんなにもたないんだ。せっかくの文献も絵もこなごなだよ。昔の日本には優れた技術がたくさんあったのに、口伝でしか継承されないから消えてしまったものがいくつもある。オートメーション化が進んで、後継者をじっくり育てる余地もない。[3]産業革命のあとに育ったのは、弟子じゃなくてビルばっかりだ」

堰を切ってあふれ出す村崎さんの話に、僕は黙って耳を傾ける。彼は遠くを見やるようにして、語り続けた。

「額装は高名な画家や美術館だけのものじゃない。ごく普通の一般家庭で、もっと日常的に楽しめるはずなんだ。子どもの描いた絵でも好きな人からもらったポストカードでも、気持ちいいなと素直に思えるものがいつもそばにあるって、すごく豊かなことだよ。額の良さを、その技術を、できるだけたくさんの人に見せて伝えていきたいって思うんだ。世間一般にとって、もっと身近な存在になるように知らせていきたいんだ。それが、俺の夢だね。人の営みと共に絵があり続ける、真の豊かな生活」

本当に、村崎さんが一度にこんなにしゃべるのを見るのは初めてだった。

普段は寡黙な彼の中にこれだけたくさんの想いがつまっていることを、僕はどうして理解しようとしなかったのだろう。

「夢が見られなきゃ、だめだ」って、そのひとことにすべてが凝縮されていたのに。

やっとわかった。

村崎さんの夢は……。額や絵に対してだけじゃない、毎日の暮らしに向けられているんだ。生身の肉体と心を持った、人々の。

村崎さんは僕にちらりと目をやった。

「なんの木を使うか決めたのか？」

僕はうなずく。

「桜を」

日本に興味があると言ってくれたジャックに、日本人の僕から親愛の情を込めて。

（中　略）

時々、村崎さんにチェックしてもらいながら、僕は時間と手をかけて木地を成形し、寸法に合わせて慎重に枠を組んだ。

額の全容が見えてきて、ほっとする一方で新しい緊張が生まれる。

鳥の羽根の彫刻。かなり重要なポイントだった。ここでそぐわない細工をしたら、すべてが台無しになってしまう。僕は図鑑や画集をいくつもめくり、いろんな種類の羽根を研究した。どんな羽根をどんなふうに彫っていくか……。

ジャックと過ごしたわずかなひとときを、思い出から手繰り寄せる。あのときジャックが楽しそうに僕に教えてくれた、ペインティング・ナイフの技法。

スクラッチ[注2]、スクラッチ。

……そうだ、スクラッチだ。彫刻刀で立体的に彫り込むんじゃなくて、ニードル[注3]で削り描くんだ。主張は抑えめに、でもエレガントにキュートに。四隅で舞うエアリー[注4]な羽根たちは、女の子が隠し持っている痛みをやわらかく包んでくれるだろう。

自分でも驚くぐらいに順調だった。羽根を刻み、ペーパー[注5]をかけ、なめらかな木地が出来上がっていく過程を僕は充実した気分で進めた。

最後は、箔[注6]押しをして仕上げだ。僕は箔が収まっている引き出しをひとつ開け、和紙に包まれた箔をそっと取り出した。

箔には、本金箔を筆頭に、本銀箔、真鍮箔、錫箔、アルミ箔、黒箔、プラチナ箔……いろいろな種類がある。

純金の本金箔を使おうと決めていた。高額でもそれが王道[b]だし、予算のことは心配するなと村崎さんも言ってくれた。なんといっても、これだけ思い入れがあるのだ。最高の輝きを授けたかった。

でも、本金箔を包んでいる和紙を開き、ゴールドのまぶしさを目にしたときに手が止まった。他人の靴を履き違えたときのような、おさまりの悪い違和感を覚える。

あの絵を魅力的に見せるために、これがベストだろうか？

僕は金箔に和紙をかぶせ、思案した。

もっとシックなたたずまいにするために、銀箔にするか。そもそも箔押しをせずに、無垢（むく）な木の素朴（そぼく）さを残したままのほうがいいのか。

c

違う、やっぱりここは本金箔だ。僕たちが再会した奇跡を祝したい。いや、でも……。

考えれば考えるほどわからなくなっていく。

自分で絵を描くときの葛藤（かっとう）や迷いとは異なるものだった。どこまで僕のやりたいようにやっていいんだろう。

注7 次郎が言っていた。額なんか作ったって、絵ばっかり注目されて空知の名前が表に出ることはないんだろ？

その通りだ。だからこそ、僕の想いだけでも強く注（そそ）ぎ込みたかったのかもしれない。

だけど……それは、額職人として本当に作品に寄り添うということだろうか？　画家の気持ちを無視することになるんじゃないだろうか？

額は絵よりも前に出てはいけない。僕が額で、ジャックが絵だ。

ジャックなら。

ジャックなら、どんなことを望む？

――――僕の絵が、ずっと居心地よく過ごせるようなフレームと出会えたら……。

あのときの彼の声が、遠くから響いてくる。はっきりと心が定まった。

使うべきは本金箔じゃない。光が強すぎて、この作品がそっと抱いている灯（ともしび）をかき消してしまう。

この絵にぴったり似合うのは……。

4 僕は本金箔を包み直してしまい、迷わず別の引き出しを開けた。

真鍮箔だ。僕はそう確信する。

真鍮箔は一見、金に見えるけれど、銅と亜鉛で作られている。その配合によって、色味が少しずつ違う。
引き出しから取り出した、真鍮箔三号色、青口。
亜鉛の配合が若干多めの、青みがかった金色。クールな輝きを持つその色は、女の子のぬくもりを引き出してくれるだろう。
注8 膠を使い、息をするのも忘れそうなほどの集中力で箔を押していく。
極薄の脆い箔が吸いつくように木と同化するたび、僕はジャックとの不思議な一体感を覚えた。
彼がここにいなくても、何年も会っていなくても、今、僕は間違いなく彼と一緒にこの額を作っている。
次郎の言うように、力の限り魂を入れ込んだって、額職人の名前が表に出るわけじゃない。どんなに考え抜いたか、どれだけ時間と愛情をかけたかなんて、そんなことは誰にもわからない。だけど。
僕が知ってる。
唯一無二の、この素晴らしい額を生み出したのが僕だってことを。
それが僕の大きな誇りだ。それでいい。
ああ、僕は今、なんて幸せな仕事をしているんだろう。
待っててくれよ、ジャック。
僕は、百年先もこの絵を守れる額を完成させてみせる。

村崎さんはしばらくの間、『エスキース』が収まった額装を黙ってじっと見ていた。
体をこわばらせながら、僕は村崎さんの言葉を待つ。
彼はゆっくりと顔を上げ、静かにほほえんだ。

「本金箔にするって言ってたのに、よく真鍮箔に決めたな、空知。見事な判断だったと俺は思うよ」
そう言ってもらえて、ほっとした。体中の力が抜ける。
村崎さんは満足したような表情で続けた。
「額縁屋にとっては、画家や作品を個人的に好きになりすぎるのもちょっとしたリスクなんだ。愛が深いほど、冷静さを失わずに何が正しいのかを見極(みきわ)めなくちゃいけない。捨てなきゃいけない感情もあるんだよ」[5]
そして彼は、額の下部に人差し指をあててちょっと笑った。
「ここの、箔の貼りムラも実にいい」
僕は肩をすくめる。
やっぱりまだまだ、パーフェクトには仕上げられない。
「……すみません、もっときれいに貼れるように精進(しょうじん)します」
「いや、嫌味じゃなくて本心だよ。手作りだからこその穏やかなゆらぎがいいんだ。飽きないあたたかみが出る」
村崎さんは額から指を離し、僕をじっと見た。
「そういうことも含めて、なにもかもがこの絵に本当に似合ってる。よくがんばったな」
嬉しかった。村崎さんに認めてもらえて。でもなんだか、僕よりも村崎さんのほうがもっと嬉しそうで、胸が熱くなってくる。
大きく息を吐き出すと、村崎さんはしみじみと言った。
「工房の求人募集をかけたとき、おまえが来てくれて嬉しかったけど、正直すぐにいなくなると思ったよ。遊びたい盛りの若者で、日々の欲に負けていくだろうなって」
目を伏せるような村崎さんの表情に、僕は自分を顧(かえり)みる。そして決意するような気持ちで、顔を上げた。[6]
「日々の欲なんて、そんなことより……夢を見られなきゃ、だめですよ」[7]
僕が得意げに言うと、村崎さんは「真似をするな」としかめ面になった。笑い出したいのを、こらえるようにして。

注1　モールディング…額の枠（わく）にするための、あらかじめ装飾や加工が施された細長い材料。一般的にはこれを用いて四角く絵を囲み、額にする。額竿。

注2　スクラッチ……刻みつける技法。

注3　ニードル……彫刻用のピン。

注4　エアリー……空気のように軽やかな。

注5　ペーパーをかけ…紙やすりで表面をこすって。

注6　箔押し……ここでは、金や銀などの金属を紙のように薄く打ち延ばしたもの（＝箔）を額竿に貼ること。

注7　次郎……「僕」の美術大学時代の仲間。

注8　膠……ここでは、箔を額に貼る接着剤。

問一　═══線a「安堵」・b「王道」・c「素朴さ」の問題文中における意味として最も適当なものを次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

a「安堵」
ア　簡潔で筋のとおった意見に納得すること
イ　励まされたりほめられたりして自信を持つこと
ウ　不安や心配が解消されて心が落ち着くこと
エ　興奮で高ぶる気持ちが冷静になること

b「王道」
ア　最も上品で洗練されたやり方
イ　一般的で最もふさわしいやり方
ウ　最も整ったきれいなやり方
エ　ねらいにあった優れたやり方

c「素朴さ」
ア　どこにでもある安い素材で作られているさま
イ　様々なものが入り交じっていてまとまりのないさま
ウ　手の加えられていないありのままのさま
エ　しっかりしていて飾り気のないさま

問二　――線１「――――――こういう額がいいっていうんじゃなくて、この額がいいって思えたら」とありますが、この言葉にこめられている「僕」の思いはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　額竿を選んで組み合わせて作ればよいというわけではなく、絵のもつ雰囲気にしっかり合った額縁を求めたいという思い。

イ　額竿を組み合わせて自分が満足できる額縁を求めるのではなく、多くの人がよいと感じる額縁を求めるべきだという思い。

ウ　伝統的なデザインを重視して額竿を組み合わせるのではなく、流行に沿ったデザインや材質の額竿を選び、額縁に仕立てるのだという思い。

エ　高価な材料を使った額竿を選んで組み立てればよいというわけではなく、できるだけ安価な材料の額竿で絵にぴったりの額縁を求めるのだという思い。

問三　――線２「俺、ひとつは流木使うから」とありますが、村崎さんがこの絵の額縁に流木を使おうと思ったのはなぜですか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　様々な苦難を乗り越えてきたであろう旅芸人の一座を描いた絵の額縁として、長い年月、厳しい風や波にさらされてきた流木は適していると考えたから。

イ　つつましい生活をしてきたであろう旅芸人の一座を描いた絵の額縁として、流木のように飾り気のない素材は似つかわしいと考えたから。

ウ　「僕」が費用のかかるやり方で額縁を作りたいと申し出てくることを予期して、自分は費用のかからない素材ですまそうと考えたから。

エ　旅芸人の一座を描いた油絵には、長い歴史とそこからにじみ出てくる独特の雰囲気を合わせ持つ流木で作った額縁がふさわしいと考えたから。

問四　――線３「産業革命のあとに育ったのは、弟子じゃなくてビルばっかりだ」とありますが、この時の村崎さんの思いについて説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　産業は盛んになったものの、社会に後継者を育てるだけの時間的余裕がなくなってきていることで、日本美術の技術の伝承が行われなくなってきたことに憤っている。

イ　機械による生産活動が盛んになり、手作りをする必要がなくなりつつあることから、日本美術の昔ながらの方法による技術の伝承が滞ってしまっている状況に、胸を痛めている。

ウ　師匠から弟子へといった、人のぬくもりを伴う技術の伝承から、オートメーション化した技術へ取って代わられ、人と人との関係性が失われつつあることを嘆いている。

エ　工業技術が発達し、効率化が求められるようになるにつれて、手作業による非効率的な作業は敬遠されるようになり、手作業による技術の伝承が全く行われなくなったことを気に病んでいる。

問五　――線４「真鍮箔だ」とありますが、これを選んだ理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　本金箔だと主役である絵よりも額縁のほうが際立ってしまうのに対し、真鍮箔の冷ややかで光沢のある色あいは、かえって絵のもつあたたかさを導き出してくれるから。

イ　はがれやすく色のあせやすい本金箔に対し、はがれにくく色のあせにくい真鍮箔は、百年先もこの絵を引き立て守ってくれるであろうから。

ウ　額縁に貼る箔は絵の作者に配慮して選ぶべきであり、作者であるジャックが本金箔よりも真鍮箔の色の方を好んでいたことを憶えていたから。

エ　本金箔の素材は金のみであるが、銅と亜鉛でできている真鍮箔は素材が一種類でないために深い色味が出て、絵に味わい深さをかもし出す効果が期待できるから。

問六　――線５「捨てなきゃいけない感情もある」とありますが、村崎さんがこのように述べるのはなぜですか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　額縁にできた箔の貼りムラのような小さなことにこだわり、いちいち不快な感情をいだいていては、かえって全体のバランスや出来映えへの注意がおろそかになってしまうから。

イ　額縁職人としての経験が未熟で絵の作者の思いを十分理解できなくてもどかしく感じても、そもそも完璧に理解することなど不可能であり、仕事をする上で邪魔な感情でしかないから。

ウ　絵や作者に対する思い入れが強すぎると、それが額縁を作る時の判断に影響し、作品の魅力を生かすことができなくなるおそれがあるから。

エ　額縁制作の対象になる絵への好悪の感情は、絵に込められた作者の思いや感情に対する正しい理解や、額縁を作る時の取り組みに影響を及ぼすおそれがあるから。

問七　――線６「夢を見られなきゃ、だめですよ」とありますが、このように言うに至った「僕」について述べたものとして、最も適当なものをア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　村崎さんから、額縁職人としてのあるべき姿や、モールディングや額縁に貼る箔の選び方といった仕事の細部に至るまでを教えられ、「僕」はようやく額縁職人として自信や誇りをもてるまでになった。そんな「僕」は今までの自分を振り返りつつ、これからも「僕」を指導してくれた村崎さんと同じ「夢」の実現のため、よりよい額縁制作に励んでいく決意をしている。

イ　額縁職人の仕事は作成者の名前が表に出ることのない地味なものではあるが、額縁制作に試行錯誤を繰り返す「僕」を見守り支えてくれる人がいて、「僕」は額縁職人としての誇りとやりがいを感じられるまでになった。そんな「僕」は今までの自分を振り返りつつ、村崎さんの話していた「夢」を思い返しながら、これからもよりよい額縁制作のために努力をする覚悟が自分にあることを確信している。

ウ　額縁職人になることに戸惑いや悩みはあったものの、額縁制作を支援してくれた人々のおかげでなんとか満足のできる額縁を制作することができ、同時に職人としての成長を自覚することができた。そんな「僕」は今までの自分を振り返りつつ、日本美術の伝承を受け継ぐ者の一人として手作りの重要性を自覚しつつ、よりよい額縁の制作に取り組まなくてはならないと自分を奮い立たせている。

エ　まだまだ未熟である「僕」が、多くの人々に支えられながら、仕事の難しさ、厳しさ、孤独に耐えなくてはならないつらさ、また額縁職人としてのあるべき姿などを村崎さんから教えられ、仕事に誇りや満足感をもつことができた。そんな「僕」は今までの自分を振り返りつつ、村崎さんの話していた「夢」を思いながら、仕事に取り組む強い決意が自分にあることを確認している。

問八　――線７「村崎さんは「真似をするな」としかめ面になった。」とありますが、これは以前村崎さんが「夢」について語った時の口ぶりを「僕」が真似たことによるものです。村崎さんの額縁職人としての「夢」とはどのようなものですか、五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問題はこのページで終了です。